

「2025年度香港中文大学サマープログラム派遣参加報告書」

京都大学経済学部3年 大熊 祐輝

① 学習成果

私は主に海外経験を積みたい、中国語を実践的に学習したい、夏季休暇の期間中に就職活動以外のことにも挑戦したいといった理由で当プログラムの参加を志望した。私は昨春に国立台湾大学スプリングスクールに参加して留学の面白さを実感し、海外への関心が高まった。そこで、行ったことがない国に行ってみたいという思いや毎日約6時間という十分な量の中国語の講義に魅力を感じて留学を決意した。当留学に参加している学生には勉学や課外活動など何かに打ち込んでいる、または打ち込んできた経験を持つ学生が多く、そうした学生との交流を通じて自身の大学生生活を見直す契機となり、大学での学習意欲が向上した。また昨今インバウンドの増加や移民の受け入れによって街で外国語を耳にする機会が増えてきた。中国人は声が大きいという意見がしばしば見られるが、中国語は声調によって同じ音でも意味が大きく異なってくるため、意味を明確に伝えるために声量が大きくなりやすい性質を持つ言語なのではないかと中国語の学習を通して実感している。異国の文化や言語を知るとは文化の違いによる誤解やトラブルを防ぐために重要である。郷に入っては郷に従えと言うが、文化理解の責任を他者に押し付けるのではなく、相互に文化を学び、理解しようとする姿勢が大切であると考えている。

② 海外での経験

私は旅行では数か国の海外経験があり、留学では先述の台湾での短期留学の経験があったが、香港に訪れたのは初めてであった。渡航前の私の香港に対するイメージは歴史的背景からイギリスの影響が見られる、経済的に発展した都市である、一国二制度が導入されている、数年前に日本でも話題となった政治的な問題を抱えている、などであり、正直なところ少々不安があった。しかし、当プログラムを通して香港に関して多くのことを知り、視野を広げることができたと感じている。私が特に驚いたのは気候、言語、経済の3点である。香港の気候は湿度が高いため気温の割に暑く感じたほか、にわか雨の頻度が高く、3週間滞在しても慣れることはできなかった。言語は主に広東語が用いられているが、通じる言語には個人差が大きかった。個人的には思った以上に英語が通じ、北京語が通じなかったと感じる。私は渡航前に広東語と北京語に大きな差は無いであろうと考えていたが、声調の数や用いられる単語、フレーズがかなり違っており驚いた。香港の経済は非常に発達していた。物価は日本の約2倍であり、日本と比較してキャッシュレス化が進んでいたように思う。また、銀行の数が多く経済都市であることを実感した。

③ プログラム内容

クラスは初級、中級、上級の3段階にレベル分けされており、私は中級を受講した。午前は文法、午後は会話を中心とする北京語の講義がそれぞれ約3時間ずつ、月曜日から金曜日まで行われた。会話の講義は勿論、文法の講義でもペアワークや講師に指名された時などに中国語を聞き、発言する機会が多くあり、リスニングとスピーキングの能力が伸びたように感じた。しかし、3週間という短期間では習得するには至らないため、プログラム後に学習を継続することが肝要である。また、講師が指名せず挙手制で発言できる機会も多かったため、積極的に発言し、講義を双方向的なものにする姿勢が求められる。課題や小テストも適度に課され、習熟度を確認することができたほか、教材も香港での生活を題材にしたものが多く、香港の文化を理解する一助となった。希望すれば香港文化を体験できる Cultural Activity が現地の学生アドバイザーを中心に企画されており、私は焼売作り体験に参加した。共同セミナーでは現地の歴史学科の学生とお互いの学生生活を共有して交流したほか、一部の現地学生と後日一緒に食事に行き、旅行では味わえないであろう香港生活のリアルを体験することができた。他にはヴィクトリア・ピークや尖沙咀、天壇大仏などの香港の観光地を巡るバスツアーにも参加した。中国語の学習を中心としつつも適度に文化体験や学生交流ができ、バランスの良いプログラムであると感じた。

④ 進路への影響

現状では学部卒で就職することを視野に入れて就職活動を行っている。願わくば長期留学にも挑戦したいところであるが、自身の現在の外国語能力を加味すると時間的に厳しいのが現実だと感じている。もし学習を深めたい研究テーマが見つかり、大学院に進学した場合には長期留学を検討したい。また、企業によっては入社後に海外留学や海外オフィスでの勤務などが可能であるため、グローバルに活躍できるかどうか自身が自身の就職活動における軸の一つとなった。